

平和祈念事業アドバイザーボード（第8回）議事要旨

1 日 時：平成24年6月21日（木）14：00～16：00

2 場 所：農林水産省 三番町共用会議所 A会議室

3 出席者：（委員）

◎ 亀井 昭宏（早稲田大学名誉教授）

○ 杉浦 力（財団法人能率増進研究開発センター理事長）

黒沢 文貴（東京女子大学現代教養学部国際社会学科国際関係専攻教授）

田久保忠衛（杏林大学名誉教授）

堀川 末子（弁護士）

[敬称略、◎は座長、○は座長代理]

（総務省）

田家 修 官房審議官

北原 久 特別基金事業推進室長

4 議事次第

（1）「平成23年度平和祈念事業実施結果報告」についての説明

（2）「平成24年度平和祈念事業委託業務のポイント」についての説明

（3）「平成24年度平和祈念事業実施計画」についての説明

5 議事要旨

（1）「平成23年度平和祈念事業実施結果報告」についての説明

23年度事業者から「平成23年度平和祈念事業実施結果報告」について説明後、意見交換が行われた。

（2）「平成24年度平和祈念事業委託業務のポイント」についての説明

資料に基づき、事務局から「平成24年度平和祈念事業委託業務のポイント」について説明を行った。

（3）「平成24年度平和祈念事業実施計画」についての説明

24年度事業者から「平成24年度平和祈念事業実施計画」について説明後、意見交換が行われた。

委員の主な発言等は以下のとおり。

- 展示物をリニューアルする際は、音声や映像の使用、背景にCGを駆使するなどの演出を工夫し、もう少し現代的且つ動的な展示手法を取り入れると、若い世代に効果があり、印象も違うのではないか。
- 語り部の学校派遣で、語り部の話を聴講した生徒を資料館に来館させるよう、学校と連携した働きかけを行うと、来館者がもう少し増えるのではないか。また、働きかけと同時に、どの位資料館に来館したのかを集計するとよい。
- 企画展について、ある家族の体験を取り上げたものがあったが、来館者に親近感を与えることができ、受け入れられやすい。広告の世界でも、個人の感情と重ね合わせるような形の手法はよく使われており、個人の体験まで落とすことには、大変意味があるように思う。
- 団体の来館者が訪れた場合、入り口が狭いため、滞留してしまうことが多い。展示室に入る前に、資料館の概要を説明するような展示ルートを設定すると、理解も深まり、記憶にも残りやすくなるのではないか。
- 常設展示コーナーと、その後の企画展示コーナー以降の空間に差異があるのではないか。使い方に何らかの工夫をすることにより、3つのコーナーで観覧した余韻を残すような空間にすることはできないだろうか。
- 「兵士」、「戦後強制抑留」、「海外からの引揚げ」の3つのコーナーの後に、展示についての理解を更に深めてもらうよう、振り返りの場を設け、学習できるような教材等を提供するのもよい。
- 入館者が過去最高となったのは非常に結構なことである。フリーペーパーや車内アナウンス等、広報の多様化を受け、効果が表れてきているのではないだろうか。
- 子どもが来館した場合に、資料館で印象に残ったものを絵で描いてもらうなど、記憶に残すといったことも一つの方法ではないか。掲示した場合には、親も来館することが予想され、また新たなつながりが期待できる。

本議事要旨は、総務省大臣官房総務課特別基金事業推進室において作成した速報版であり、今後、修正する場合がある。